

受難と和解

—10月19日・20日の活動に参加して

沖縄タイムス 謝花 直美

10月20日、「安野 中国人受難之碑」前にもうけられた献花台。そこに手向けるように手渡された1輪の菊が、重く感じられた。前日には「和解10周年記念集会」で、被害実態調査、裁判と和解、和解事業と、関係者の方々と当事者の方々がともに歩



集会で挨拶する許立成さん(左)と肖翠青さん(左から3人目)
(2019年10月19日、広島弁護士会館)

んだ道りを学んだ。遺族の許立成さんと肖翠青さんお二人の話、フィールドワークでは、強制連行された方々が水力発電のために掘った8キロのトンネルや収容所のあった場所を訪れた。事実として学んでいたことが、実際のお話やその場に立つことで、そこに確かにいた一人ひとりの人生として立ち上がってくるような感覚を抱いた。静かな農村の風景の中に、75年前この地に強制連行された方々のかすかな「声」が聞こえるようだった。事実と現在も続けられる和解の取り組みを知ったからこそ、「受難之碑」に菊を手向けたお前はどのようなのだという、問いかけの重さが、一輪の菊の重さとなって感じられたのだと思う。

父を連行された許さん、祖父が被害にあった肖さんのお話からは、強制連行された方々の戦後も続いた苦しみ、家族全体の苦しみを知らされた。許さんのお父さんは、水につかったトンネル掘りで足を悪くして、帰郷後に右の足を切断しなければならな

ったそうだ。また日本とのかかわりを疑われて、そのため良い仕事につけなかったという。許さんの経験を通して、強制連行を過去の事象として、無意識に考えていた自分に気づかされ、国を隔てても同じ時代に生きることを意味に気付かされた。亡くなられた方々を追悼するだけでなく、生きのびることができた方々の労苦も含めて「受難」という言葉によって、強制連行された人々、その被害にどう向き合うかが問われているのだ。

フィールドワークで、栗栖薫さんが細かな点までこだわって、連行された人々の姿を伝えようとしている姿に、和解の道ゆりや和解事業を支えてきた方々が、どう向き合ってきたのかが象徴されていた。住民の多くの体験が記録された沖縄戦では、確かにいた朝鮮の方々の存在がほとんど記録されず、戦後75年を経ても、全容はわからないままだ。強制連行の経験を、自分の経験とともに語ることで、今もともに生きている人々ともう1度向き合うことができるのだという大切な視点を教えられたように思う。ともに生きるという感覚と、未来を開いていくという取り組み。それが、継承と和解事業によってなされていることに胸を打たれた。

川原洋子さんは、「受難」という言葉に託された意味を、「死者だけでなく生存者の歴史も伝える」ことだと説明された。この事件を現在から幾度も振り返り伝えるという決意。「受難碑」に名を刻まれた方々が、将来いなくなったとしても、そのご家族とその経験に何度でも向き合い、お互いに理解しようとする姿勢がこの言葉に込められている。

これまでの長い取り組みを未来に開いていく現場で学んだことは大きい。和解し続けるために尊い取り組みを続ける関係者の方々に心から感謝したい。